

小規模校における集団種目の在り方についての一考察

東 哲平 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 森川 みえこ

キーワード：小規模校 集団種目 個人差 (能力差)

1. 緒言

文部科学省(2008)は児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくことが重要であり、小・中学校では一定の集団規模が確保されていることが望まれる。学校の適正規模と適正配置を確保しようと、学校統廃合が進められている。しかしながら近年、家庭及び地域社会における子供の社会性育成機能の低下や少子化の進展が中長期的な継続が見込まれること等を背景として、学校の小規模化に伴う教育上の諸課題がこれまで以上に顕在化することが懸念されている。

織奥(1993)は小学校の小規模校における体育授業に関する研究で、教科体育授業展開に関する問題点として、児童数が少ないために集団種目が行えず、異学年1学級を編成し、同単元同内容で単元が構成されることが多いと述べている。しかし異学年1学級を編成することで、個人差(能力差)が大きいため他方に活動範囲や得点に差をつけるなど特別な対応を行うことや、児童の指導が焦点化しにくい、などの問題があるとし、学習指導や学習活動に一層の工夫が要求されると報告している。

そこで、本研究は小規模校で集団種目を行うにあたり、個人差(能力差)が大きいため生じる課題に対してどのような工夫がされているのか調査を行い、小規模校での体育の在り方の検討を試みた。

2. 研究方法

調査対象は、滋賀県内の小規模校 A 校、B 校、C 校、D 校と京都府内の小規模校 E 校に質問紙アンケート調査を実施した。

3. 結果及び考察

第5学年及び第6学年で取り扱っている集団種目については、全校とも、ゴール型、ネット型、ベースボール型の種目を1つ以上取り扱うことができていた。

個人差(能力差)及び体格差の課題に対しての工夫には、複式学級で行っているB校、C校、E校において、ネット型(ソフトバレーボール、ドッジボール、ドッジビー)やベ

ースボール型(ティーボール、ソフトボール)は身体の接触が少ないため、体格差による課題に対して配慮せず取り扱うことができることから、ネット型、ベースボール型で集団種目を充実させることができるのではないかと考えられる。

能力差に対する課題に対してA校、B校、C校、E校では、教員2人体制と能力差のある児童同士のペア学習で授業を行っていた。また、児童の実態や学校の特色に応じた工夫には、能力の低い児童に合わせて打ちやすいボールを投げたり、走るベースの距離を近づけたりするなどの特別なルールを設けていた。

児童数が少ないために生じる課題に対しての工夫には、複式学級で集団種目を取り扱うことで、児童数の問題を解消していた。全校ともに共通して、異年齢の児童と一緒に集団種目を行う機会が数多くあることがわかった。こうした環境は、社会性の中でも、相手を思いやる心を育むことができると考えられ、通常校ではみることができない小規模校のメリットの1つであると考えられる。

4. 結論

小規模校では、複式学級を編成し教員2人体制やペア学習などの工夫により、ネット型、ベースボール型は、各単元を充実させることが可能になると言える。ゴール型では、身体の接触があるなかの攻防を行うため、児童の実態に応じた特別なルールを取り入れることが必要である。しかし、相手を思いやるがゆえに、勝敗に対してのリスクが少なくなるや、能力の高い児童が思い切った運動ができないなどの問題がある。そのため、児童同士が切磋琢磨し合える環境を提供する必要があると考える。

5. 引用参考文献

織奥信男(1993)「小規模校における体育授業に関する研究：極小規模校の教科体育経営について」体育・スポーツ経営研究 10 (1) 57-72
文部科学省(2015)「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き—少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて—」